

## 〇〇～2歳児に係る平成28年度社会教育委員会発言集

### ■講座等への参加・意識

- ・講座の募集をしても、興味や意識の高いかたが参加され、支援が必要なかたや参加してほしいかたが参加してくれない。
- ・参加してくれないかたに学びの必要性をどのようにして判ってもらい、必要な情報を伝えることができるか。

#### 【状況】

- ・募集しても興味があるアンテナの高い方が参加され、支援が必要な方や参加してほしい方がどれだけきてくれているかということが課題である。
- ・参加しない、興味のない親に対しての支援が一番の課題。参加しないお母さん達に学びの必要性をどう認識させるか。
- ・問題のある子のお母さんをいかに引っ張り出すか。必要な情報を必要な人に伝えることが大事。
- ・関心が高いお母さん達は車で移動できるので、地域に関係なく参加している。
- ・参加してくれたお母さん達にも、次の学びにどう繋げていくかが大事である。
- ・講座へ参加についての意識が高い人と低い人の差が激しい。
- ・面倒くさいという人は多いと思うが、ほんとうは違う理由かも。
- ・あの人に会いたくないからとかの理由の人もいるかもしれない。
- ・私は産んで2ヶ月で仕事に復帰したので、こういう支援とかは知らなかったし、行く暇もなかったと思う。仕事をしていることで行きたくてもいけない人もいるだろうと思う。
- ・意識の高い人は、勝手にやるし、自分で調べてたりする。孤独を抱えている人や貧困な人、離婚した人、別居した人など、生きることに精一杯で、子どものために出て行こうとか余裕がない人も一杯いるのでは。
- ・ホームページに掲載したり、チラシを配ったりして、情報発信しているが、本当に来てほしい人には、参加するということまでダイレクトに届かないのが実情。
- ・講座に参加しない人は、何をやっても参加しないのでは。ほんの少数のかたを対象とするよりも、多数の人を対象にした講座がいいのでは。良いか悪いか別だが。
- ・意識が低い親、繋がりを持たない親はどうしてもいる。繋がらない親はどうしたらいいか。

#### 【対策】

- ・届かない対策として、就学時健診のときに、家庭教育支援員に協力してもらい、15分の短い時間のなかで、「子育て大事だよ、子どものことちゃんとみてね。しつけとはこうなんだよ」と振り返りでチェックをしたり、ちょっとしたコミュニケーションをとりながらやっている。(始めて4年目である。)
- ・県内では川根本町が子育てしやすい町として新聞に掲載されていたが、地域性も関係するのか。都会の夫婦だけで子育てするのと家族、親戚等の関わりを受けた田舎での子育て。家庭教育を考えるうえで頭に入れておく必要があるかもしれない。
- ・県内の育てやすさがいいのは川根本町。三世代のお宅が多い。結果的に子育てが楽。そこは太刀打ちできない。川根地区には、子育て支援センターがあり、児童館もあるなど地域に学びや相談をする環境が整備されている。
- ・運動遊びなど楽しそうなものに対してはアンテナが高い傾向にある。学び系になると関心が薄

い。

・家庭ということはとても大事なので、親の意識、しつけにしてもちょっとしたテクニックを学ぶことで親子関係がうまくなっていくことがある。やはり学び、知ることが必要。伝えていかなければいけないなど。ただ、参加してくれないということにジレンマがある。

・できないところをつつくのではなく、できているところを褒める。そういったちょっとした気付きを感じることができる。参加してほしいと思う。

・来てくれる人には好評だと。やってほしいという親は来てくれないと。そういった人たちがきたときはキャパがいっぱいでは？学校や公民館に拡げなければならない。

→地域に拡げることが大切かなと思う。

## ■発達障害

・親としては、わが子が大事だし、認めたくない、大きくなれば変わるかなという親心。

・発達障害という言葉が判らない、認めないというのは、悲劇になってしまう。それが判っていれば、関わり方がおのずと判る。

・目指す支えは早期発見、早期支援。保護者にいかに気付いてもらえるか。もう一つがライフステージを通じた支援。切れ目のない社会ぐるみでの理解と支援。

・最初は、健康づくり課の乳児健診で把握。医学的も含めて気になる子については健康づくり課がサポートして、それ以外については、社会教育課が親に力を付けるということでサポートしている。

・発達障害という言葉が判らない、認めないというのは、悲劇になってしまう。それが判っていれば、関わり方がおのずと判る。

・乳児健診の段階で、医学的診断ができていれば、親も納得するのかな。

→その段階で診断は難しい。子どもの特性なのか、関わり方で変わるのか、見極めが難しい時期。

・親としては、わが子が大事だし、認めたくない、大きくなれば変わるかなという親心。

・親子の関わりで発達に関係なくても過干渉だとか、中学高校で自分では何もできないとか、問題を起こすとかの可能性はある。親子の関わりの学びが必要かなと。

・こういうときに学んでくれればいいが、意外とそういう保護者に限って壁を作って、参加しないということもある。・支援がとぎれないよう関係課で連携を始めている。

・ことばの相談を今年度から開始した。

・親御さんが受け止められない現状がある。家では1対1の関係だからいいが、集団だと難しいことが判ってもらえない。

・目指す支えは早期発見、早期支援。保護者にいかに気付いてもらえるか。もう一つがライフステージを通じた支援。切れ目のない社会ぐるみでの理解と支援。

・情報の共有として、お母さんに持ってもらうサポートファイルの検討をしている。

・社会教育課としては、個別に問題のある発達支援の必要な子をサポートすることは得意ではないので、通常、問題がないという親の力を高めていく。より自立できるような賢い子を育てる。

・発達障害のレッテルを貼られたくないという保護者の意識

→いつ、どの時点で、保護者が子どもの特性が納得できて、子どもに合ったところを選択できるか判らない。1歳6ヶ月からの子どもの特性は正確に保護者に伝えるようにしている。

・発達障害というのは、“障害”というネガティブな部分が出るから、保護者が隠したくなる。エジソンやアインシュタインもそう、優れたところを見つけていけば保護者は納得するのでは。

・専門家がチームになって、多方面から考える。小学校の先生の経験のある人がチームに入って、「小学校に入ったら、こうなっていたらいいよ」と声をかけるのは効果があると各所で聞く。相談の専門部署にも小学校教員の経験のある人が入ると聞いている。

・発達障害は、子どものときに判ればいいが、大きくなってから判ると、保護者が自分の育て方が悪かったのではとなってしまう。子どもが小さいときに専門家が対応する島田市の部署はどこか。

→子どもの特性が強い場合は医療機関から上がってくることが多いが、赤ちゃんの家庭訪問や乳幼児健診が全数の把握となるので、ここでの面接を経て、特性が強い場合には臨床発達心理士が2次の発達検査を行い、保健の部分と発達を取り扱う子育て応援課で連携し、親子学習会（つくしんぼ）で1次療育をしていく。その際は、医療機関や療育施設と連携もしていく形になる。就学時には、学校支援委員会が関わってくる。

・発達障害の障害という言葉はネガティブになってしまうが、すごく秀でた人も多い。優れた部分をどのように伸ばそうとしているか。

→社会に出て困るところを支援する。

・対人が苦手ならその部分は置いておいて、いいところを伸ばすことか。

いいところ探ししていくことが必要。

→そうです。スキルトレーニングができる場所が必要。良いところを伸ばしていくことが大事。

・ライフステージを通じた支援、社会ぐるみでの理解と支援が、今後、私たちが答えを出さなければならないところかな。

・発達障害のレッテルを貼られたくないという保護者の意識

→いつ、どの時点で、保護者が子どもの特性が納得できて、子どもに合ったところを選択できるか判らない。1歳6ヶ月からの子どもの特性は正確に保護者に伝えるようにしている。

・発達障害というのは、“障害”というネガティブな部分が出るから、保護者が隠したくなる。エジソンやアインシュタインもそう、優れたところを見つけていけば保護者は納得するのでは。

・専門家がチームになって、多方面から考える。小学校の先生の経験のある人がチームに入って、「小学校に入ったら、こうなっていたらいいよ」と声をかけるのは効果があると各所で聞く。相談の専門部署にも小学校教員の経験のある人が入ると聞いている。

## ■お母さん達の子育てへの意識、状況

・問題点としては、生後2～3ヶ月の赤ちゃんのいるお母さんのストレスが大きい点

・子育て中のお母さん達は答えを求めていない。聞いてもらいたい。悩みを聞いてもらいたいだけである。

・問題点としては、生後2～3ヶ月の赤ちゃんのいるお母さんのストレスが大きい点

・広場にくるお母さん達は、もやもやしたことはスタッフに話す。答えを求めていない。聞いてもらいたい。地域に相談する人がいない。核家族が多い。頼ってきている現状がある。

・ベビープログラムには第1子のお母さんがたくさん参加してくれている。子どもが大きくなる

につれて、安心して学びはいいやと参加しなくなるのを懸念している。

- ・育休中のお母さん、復帰する予定の仕事が気になると。早く復帰しようと子育てを疎かにしていないか？

- ・私は産休のみで復帰したが、復帰後は逆に子どものことがきになってしまう。両方、かかえてしまう。そこを支援してもらえればうまくいくのかも。

- ・0歳児をもつお母さん達の対象の会では、地縁もないお母さん達が泣いてお話しする。悩みを聞いてくれてうれしいと。

- ・お母さんの中には自分の子は自分で育てたい。お姑さんの言うことは聞かない。NHKでもやっていた。自分の旦那でも子供のためにならないなら敵だと。

- ・今の30代のお母さん達は、自分が幼いときに、自分自身の子ども部屋が個室になった時代。中学生ぐらいから自分の時間を持てた。子育てしていると自分の時間が無くなってしまうと。自分の時間を確保するために、朝食を止めたり、テレビを観たいからと子どもの就寝時間を遅くするなどのお母さんがいた。

- ・自分の生活スタイルを親になっても変えられない。

- ・深夜、スーパーに親子をよくみるようになった。

- ・なぜ、同居しないか？自分たちと生活スタイルが違う。自分も持っている価値観を同居することで変えられるのはいやということらしい。

- ・お子さんが1歳の誕生日を迎える時期に復職するお母さん方が多い。健診は母子保健法の中で決まっているが、仕事との調整が難しいなど健診を受けないお子さんもいる。

- ・乳幼児健診を受けてくれないお母さんもいる。現在は、安否確認の意味もある健診なので、虐待予防や居住の確認として重要である。受診しない方は決まっている。1人目に来ないと2人目も来ない。未受診が続けば、家庭訪問に夜間でも伺うし、祖父母のところにいると判ればそちらにも伺う。

- ・今いろいろな情報がある中で、お母さんのポリシーというか、食のことやリトミック、教室の考え方なことなど、主張される方がいるが、これが正解という育て方というのはないので、お母さんの思いは受け止めて、こちらでお伝えしたいことはお話しをさせてもらっている。

- ・町内会付き合いに出たくない、子育てに関しては情報が無い。学ぶ場があればいい。

- ・離乳食の教室を行っているが、相談も多い。子どもに一口与えたら嫌がったのでそれで止めたとか。情報が少ないとか、不慣れということがあると思うが、お母さんの育児ストレスを溜めないように、相談の場を情報提供や啓発の場としている。

- ・各種健診は、意識の高い方が受ける。何年も受けていない方がいざ受けると異常のある方が多い。受けた方には毎年続けてもらうようにアプローチをしている。受けない方には、タイミングを見計らい、あの手この手を使って受診勧奨している。

- ・予防接種を受けさせない親イコール健診未受診ではない。身体に薬を入れさせたくないという理由とか。自然治癒力を高めるために、異物を入れない。宗教的にという方もいると思う。強制的に行ってくださいということではできないので。

- ・SNSの影響を感じる。いろいろな動画がアップされている。離乳食の食べ方とか。動画どおりに食べないけど異常でしょうかとかの相談もある。

## ■行政の関わり

・個別性、継続性でどこまで支援ができるか。役所とそれを取り巻く機関が雇用まで含めて全部かかわらないとできない。社会教育課、健康づくり課、子育て応援課、商工課、社会福祉協議会、医療機関など。

- ・社会教育課は、子ども達に対する直接の支援策は少ない。家庭教育の難しいところは親だけを見てればいいわけではないところ。
- ・健康づくり課は、妊婦のときから関わり、赤ちゃん訪問として、赤ちゃんとお母さんの様子を見てくる。関わったほうがいいと思えば、ベビープログラムを紹介してもらったりする。
- ・保健師は1対1。社会教育課は、集団で学びということを通して関わっている。また、社会教育課は仲間作り、同じ子育てをしている者同士でいろいろなことを話し合っ、仲間を作って不安を解消していこうというところを担っている。
- ・コミュニケーションを取り入れた講座が増えてきている。アイスブレイクを取り入れて、心ほぐしや仲間作りを講座の始まりに講師が行ってくれる。
- ・個別性、継続性でどこまで支援ができるか。役所とそれを取り巻く機関が雇用まで含めて全部かかわらないとできない。商工課、社会福祉協議会、医療機関。
- ・子育て応援課が、アルバムみたいなものを作製する予定。全員に分けたいが、取り急ぎ支援が必要はお子さん。
- ・市の人事課長と話をしたが、子育て後の復帰した職員が基のスキルに戻らない。伸び悩む。復帰する前に研修とかやったらどうかと。職域で同時期に産んだ職員で集まるとか復帰前に先輩の職員と懇談するとかプログラムはどうかと話をしている。
- ・何かで代替しないといけないが、そこが「赤ちゃん広場」であったり、ママ友、ママ会、自主的に集まろうとする本能ではないかといわれている。来年度、事業として広げていこうと思っている。
- ・0歳時からのアプローチは、教室や講座もあるが、母子、家族の健康として、家庭訪問事業、健診事業、健康相談事業をやっている。
- ・病気の発見や成長発達のチェックだけが健診の目的ではなくなっている。それに加えて、お子さんの節目におけるこれからの見通し（例えば、4ヶ月で首が据わったあと、何ヶ月でハイハイができるか）など、いろいろな情報提供の場、お母さんをサポートする場となっている。
- ・予防接種には、定期（行政でお金を負担する）と任意（保護者の意向）がある。「注射をもって病気の予防をしない」と予防接種をしない保護者も最近はある。ただただ、注射を受けてくださいとお願いしている訳ではなく、病気になったときのリスクなどの情報を伝えながら予防接種を勧めている。
- ・母子健康手帳交付するときもお母さんの心療内科や精神科の受診歴を聞く。それぐらい、妊娠・出産というのはホルモンバランスも変わると同時に、気持ちにもストレスがかかる。その時点から相談をかけてもいい窓口だと思ってもらえるようにしている。言葉を選んでお母さんに接している。いつどこでスイッチが入るか判らないので、配慮しながら面接等を行っている。
- ・お母さんを一人にできるだけしないほうがいいと言われているので、お母さん方が集まる機会を増やしていこうと考えている。現状では保健師を保健センターから地区に配置することは難しいので、地域に出張型で声を拾えるような場を設けていくことは効果的だろうと思う。
- ・母子健康手帳を交付するには、医療機関から妊娠届出書を貰って提出する必要がある。妊婦健

診の助成券を出すので証明としてほしくなる。そのときに、妊娠中の経過・産後里帰りするか・育児支援の手の有無等の聞き取りを行って、お母さんとの関係を作っていく。母子健康手帳の面談に30分ほどかかる。

- ・保育園にある10箇所の子育て支援センターに妊娠中から出掛けてもらって、先輩ママと交流してもらいマイ支援センター登録も促している。相談窓口として何かあったら、ここに相談してと、意識付けをしている。

- ・地域子育て支援センターは中学校区にひとつあるが、ワンストップの相談体制、お年寄りも子育ても相談できるものが理想。

- ・平成26年度から「子育てコンシェルジュ」を子育て応援課に設置。妊娠したときから子育て支援の始まり。7ヶ月の健診時に出向いている。

- ・育児に対しては、いいことだねと温かく見守ってほしい。

- ・地域へ出る第一歩となる交流の場として、アラフォーママミーゼの会やアラフォーレディースの会を開催。外国人ママや県外出身ママの会も実施。

- ・早寝、早起き、朝ごはん。乳幼児健診のときに食べた献立を書いてきてもらい確認、助言している。基本的な生活習慣も記録してくる。

- ・0歳児の講座に参加したら、学校に入るまでは面倒をみるぐらいの気持ちで講座を開催したらどうか。講座の度にお土産を持たせる。デジカメで写真を撮って渡してもいい。

#### ■○家族・地域等のつながり

- ・現在は核家族化、近所にも仲間はいない。おせっかいな人がいない。
- ・家族、近所、職場など、まわりの理解、教育が必要。

- ・昔は近所におせっかいな人がいた。人間は集団で子ども達を育てていく生き物なのに、今は孤立させている。子ども産むとエストロゲンというホルモンが急激に減って、孤立感を深める。組み込まれた本能による集団で抱えなさいよと信号を出しているのに、そうさせない社会である。核家族化だし、近所にも仲間がない。

- ・人間関係を深めさせることが重要ではないかと思う。

- ・教育委員会以外でやっているところがあるか。また、有料、民間でやっているところは？

→ベビーマッサージはあります。健康づくり課と子育て応援課とは、すみ分け、アプローチの仕方を検討しています。

- ・おせっかいの出番の見定め方が必要。

- ・届かない人、心を開かない人にどう繋がるか。NPOの視点として、子どもわくワークなど、チラシなどを学校を通して配布して、行ってみたいとか、地域に関わってみたいとか思わせる仕掛けから、ちょっとでも変わっていただければいいかなと思っている。

- ・深刻化する前に支えていくいい方法があれば。

- ・家族構成に依存することは難しい。

- ・祖父母の立場で言うと、孫の世話で神経がすり減っている。

- ・実家の両親に、私の妹たちが一緒に住もうかと言ったら、自分たちの時間が孫の世話でなくなるから遠慮すると。年を重ねても、今の高齢者は元気だから、自分のことをやっている人が多い。

- ・お祖父さん、お祖母さんの意識改革が必要かも。

- ・職場の問題も絡んでくる。職場の配慮が必要。
- ・健診を受けたいけど受けられないという人がいるのかも。赤ちゃん広場に来たお母さんは、自分の生活習慣が悪いので、そういう所に行くのが怖いという。大丈夫だよと声掛けをしたが。何か言われてしまうかも身構えてしまうようだ。親に成りきれないお母さんもいる。
- ・健康づくり課の事業一覧をみても、きめ細やかに一所懸命やってくれていると思う。私の活動もいろいろなところに関わっているので、保健師さんの思いが伝わってくる。気になる点は、未受診の方が何%かいるということだが、お母さんの心が病んでいる人が行けないのでは。うつ状態のお母さんから相談が私にあった。もっと専門家のところに行ったら、勧めるが行けないようである。何言われるか判らないとか、みんなに判ってしまうと。心が開けるのは身近で、この人なら大丈夫と思う人でないと相談できないようである。小さいコミュニティに関わっている人達に情報を伝えていけば、その人達が動くかなと思う。私が活動している親子体操などの小さなコミュニティの中で、いろいろな悩みを言っていく。
- ・母子健康手帳をもらうときは、金谷町時代は、夫婦で来るようになっていたと思う。(土日設定)これから起こる大変な子育ての話と一緒に聞く。地域の方々もいるが、頼れる一番は旦那さん。
- ・家庭でやるしつけ、食育はあるか。夜遅くに子どもがスーパーにいる。
- ・当事者だけでなく、高齢者など市民に判ってもらう教育をしていくことが必要。
- ・子育て世代と老人世代と交わる事業が必要。
- ・男性に対する教育が必要。専門的な知識をもってもらおう。